福島のこども保養プロジェクト（コヨット!）
「親子のための、あたたかジャズ・ライブ」

●福島市で親子を対象に、ジャズライブを開催

2013年8月3日、福島県生協連の「福島のこども保養プロジェクト（コヨット!）」の一環として、「震災被災地の親子に音楽を楽しんでもらおう」と、福島市大町のジャズスポット「ミンガス」で、福島県在住の小学生と保護者を無料で招待した「親子のための、あたたかジャズ・ライブ」が開催されました。

出演はジャズヴォーカリストの豊田チカさんと小山太郎トリオの皆さん。豊田チカさんは、タレントでジャズ評論家の大橋巨泉さんとジャズ歌手のマーサ三宅さんの次女です。良質の音楽にふれて育ち、17歳から弾き語りの仕事を始め、30年以上歌い続けています。小山太郎さんたちも国内外で高い評価を得ているミュージシャンです。

この日に集まったのは、福島市内の子どもたちと保護者の約50組。福島市の夏祭りのトップを飾る「福島わらじまつり」の日とも重なって浴衣姿の女の子たちも目立ちました。

ジャズのリズムや楽器についての楽しい話のあと、豊田チカさんが登場。『ドレミのうた』に始まり、『月の沙漠』、デューク・ エリントンの名曲『キャラバン』、豊田チカさんが子どもたちのために作詞作曲した『両手を広げて』、そしてGReeeeNの『キセキ』も。みんなが知っている曲は一緒に歌いました。

同じくデューク・ エリントンの『スウィングしなけりゃ意味がない』では、スキャットの部分を子どもたちにも歌ってもらい、子どもたちもマイクに向かって熱唱、あっという間の2時間でした。

チカさんと小山太郎ピアノトリオの皆さん。

●福島で歌いたかった

「福島ではずっと歌わせていただきたかったのです。今回は、福島県生協連の職員の方と私の夫の豊田秀明が旧知の仲だったことなど、いろいろなご縁でライブを実現できました。ご協力いただいた皆さんに感謝します」

そう話す豊田チカさんは、東日本大震災の後、千葉のFMラジオ局（bayfm）で被災地に向けたジャズ番組のDJを務めました。「1年間、被災地に向け、上質の音楽を発信することにまい進しました。『番組を楽しみにしています』という声や、『頑張って！』など、たくさんの方からメッセージをいただき、いろいろなことを学びました。そのなかで、日本人として、母親として、そしてアーティストとして、何かができたらと心から願いました。今日はイベントができて本当によかったです」

歌詞をひらがなで書き、子どもたちも
一緒に歌いやすいように工夫するチカさん。

福島県生協連顧問の熊谷純一さんは、「イベントに来る子どもたちの目は輝いています。大人も同じですね。日常的なストレスの解消になってもらえればと思います。震災や放射能に関する報道も減り、『我々は忘れられているのではないか』と不安に思う人が増えているのが現実です。本当の意味の放射能問題の収束はまだまだ先で、生協が何をできるかを考えていきたいですね」と話します。同県連の根本喜代江さんは、「震災から3年目を迎え、こうしたイベントやボランティア活動は、どんどん減ってきています。生協だけでもなんとか続けていきたいと思っています」と話していました。ライブの会場となった「ミンガス」のオーナーの松浦 哲さんは、「福島に生きる者として、皆さんが来てくださるのは本当にうれしいです」と感想を述べていました。

スタッフの皆さんと一緒に。